日刊
両毛新聞

叔父が日米繊維交渉に

田中角栄大臣と遣り合う

広報写真のモデルにも

論考

叔父の足立修三

斉藤 ヒサ（旧姓・足立）
手縫い帽子教室主宰・足利市西宮町

トリコットと共に育った私（下）

またある時は、光ったビスのトリコット地に花柄がプリントされたワンピースを着せられて「こんどうちの工場で作ることになったものです、と言って近所中に見せて来なさい」と父に命令されたのです。恥ずかしくていやだったのですが1軒目の家で「かわいいね」と言われると嬉しくなって10何軒か回ったところでしょうか。老夫婦2人だけの家に行ったところ「これが新しい布地なんだね」と撫でたり引っ張ったりされました。2人にとってはカルチャーショックだったのでしょう。このころはまだ、我が家の工場は重い機械を設置するための改修中だったので台丸というメリヤス機械が1台あるだけでした。このワンピースは組合からの借り物だったと思います。このように組合はスタート前からいろいろと広報活動をしていたのです。

小学校の1年のころです。組合はサクラフィルムのモデルを呼んで撮影会を開きました。午前中は渡良瀬の土手、午後は織姫神社の境内に場所を移して行われ、私も4、5人の子といっしょにモデルになりました。この時の写真を使って全国に向けての小冊子を作成しています。それには足利ジャージーと書かれていたと思いますが定かではありません。同じころ『足利ジャージーの歌』の懸賞募集もありました。入賞採用されたのはこのような歌詞だったと思います。

吹けよそよ風　つぼみが開く
あのこも　このこも
ジャージー好み
燃える青春　いとしや胸に
夢を包んだあの姿
さあさ召しませ　足利ジャージー

（確かな資料をお持ちの方はお教えください）

レコードになり配られましたが、新しい素材の盤であったので今までの針は使えませんでした。黒ではなくピンク色の半透明のレコードであったのが珍しくて忘れられません。ソノシート等の色透明の安価なレコード盤が出まわるずい分前のことです。

昭和40年、私は正式に家業を手伝うことになりました。結婚により足利を離れる1年程前に日米繊維交渉が始まります。私にとっては現在のTPP問題よりも身近で大きな問題でした。今考えると、日米繊維交渉のあたりからアメリカ追従の自主性のない国になってしまったのではないかと私は思います。

業界の代表として、日本化学繊維協会の専務理事であった叔父（足立修三）が田中角栄通商産業大臣と丁々発止で遣り合ったこと、そして帝人の社長であった大屋晋三氏から「帝人の社長にならないか」との内々の話があったが健康上の理由で辞退した父が亡くなりました。叔父が亡くなった繊維交渉の記録の中に校である群大に寄贈してありPP問題を受けての心構えになることがあるのではないか思っています。

我が家は、けて50歳代でましたので兄社長になりました財産を

兄が組合の皆様に遅れることなく30歳でトリコット団地に進出出来たのはすべての組合の皆様のお引き立てによるものと思います。父が吉孫さん、三田さんのお誘いを受けて組合に加入し、スタート時から役員として尽力したことを知っていて下さる方々がご存命で、若い兄を助けて下さったのです。両親はお金に代え難い人脈という財産を残してくれました。

団結力・相互扶助・トリコット工業協同組合は希有な団体であったと思います。組合の存在意義を改めて強く感じ、感謝しています。

トリコットの名は道標と織姫神社のトリコット広場に残すだけになってしまいました。しかし、戦前は銘仙が、戦後はトリコットが牽引役となり足利が繁栄した期間が少なからずあったことは、郷愁としてだけではなく足利人の精神構造にいくばくかの影響を及ぼしている言うまでもなく